

世界

1946年1月1日創刊
2020年12月1日発行
(毎月1回1日発行)

2020 December
no.939

SEKAI 岩波書店

世界

SEKAI

2020

特集

コロナ災害下の貧と困

一九四六年一月一日創刊
二〇二〇年二月一日発行
(毎月一回一日発行)

©岩波書店 2020年 本誌掲載記事の無断転載をお断りします。

編集・発行者 熊谷伸一郎 印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 (株)岩波書店 本誌編集部電話 03(5210)4141 FAX 03(5210)4144

特集1 コロナ災害下の貧と困

自助か
連帯か

雨宮処凛 後藤道夫 田端博邦 山崎 憲 竹信三恵子 山家悠紀夫 笠井哲也



特集2 学術会議任命拒否問題

—わたしはこう考える

保阪正康 上野千鶴子 大沢真理 杉田 敦 前川喜平 古川隆久

核兵器の終わりが始まった — 禁止条約発効の意味 川崎 哲

異常気象が異常でなくなった世界 今田由紀子

権謀の人 — 政権のシナリオライター 斎藤貴男

ネグロスからの手紙 — 虐殺と弾圧の島で クラリッサ・シングソン

書評 | 玄武岩 藤沢 周 松井隆志 向井和美

世界 第九三九号 二〇二〇年十二月

核兵器の終わりが始まった 川崎 哲
異常気象が異常でなくなった世界 今田由紀子
ネグロスからの手紙 クラリッサ・シングソン

定価(本体八五〇円+税)

12



HMAEN
TOKYO

hmaen.com

雑誌 05501-12
ISSN 0582-4532
Printed in Japan



4910055011202
00850

グローバル都市をあるく ソウルの夢

連載……第4回 鍾路・乙支路
——流動する都心



2014年に開館した「DDP（東大門デザインプラザ）」。

かつてここには韓国スポーツの象徴「東大門運動場」があった。（筆者撮影）

世界 SEKAI 2020.12

ソウルに詳しい読者のなかには、ここ十数年間、旧都心がめまぐるしく変化していることに気づいた人も多いのではないだろうか。二〇〇〇年代半ばからは、清溪川が復元され光化門から東大門までの風景を変えている。二〇一〇年代には、二〇一四年に完成した巨大建築物「東大門デザインプラザ（DDP）」をはじめ、様々な建築物と造形物が都心の伝統的なイメージを転換させている。

ランドマークだけではない。仁寺洞、広場市場のような「ソウルらしき」を代表する場所として長く親しまれてきた観光地以外に、北村、西村、益善洞、乙支路などといった古い街が、次々と新しい観光スポットとしてガイドブックに登場している。その一方で、「不在」も目立つ。鍾路一街にあった朝鮮時代からの大衆飲食店街だった「遼馬通り」は撤去されているし、つねににぎわっていた鍾路二街の繁華街はいまも元気がない。このような都心の変容は、日々新しい「ソウルらしき」をもたらしている。何が、ソウルの「都心」を変えているのだろうか。

ソウルの都心

「都心」という言葉にはおおまかに二つの意味がある。「都市の中心機能を担う」という意味と、「都市の地理的中心にある」という意味だ。大きく成長した都市では、大体九四年には、「ソウル市都市基本計画」において「都心部の管理」が主な課題のひとつとして設定された。

一九九七年のアジア通貨危機を経て二〇〇〇年代に入ると、旧都心の復元・整備・再開発が本格的になされはじめた。そこには二つの側面があった。一つは、江南や汝矣島など、実質的に複数の都心が存在するなかで、どのような機能によって旧都心を活性化させるのかという都市計画的な側面。もう一つは、旧都心にどのようなイメージとアイデンティティを与え、「ソウルらしき」の生産と消費につなげるのかという文化的側面。

こうした動きは、ソウルの内側と外側の認識とまなざしとともに、旧都心の構造を変容させた。その再構造化がもっとも多様なかたちで表れているのが鍾路である。鍾路を歩いていると、偶然性・流動性・両義性によってつくられた旧都心の新たなアイデンティティがみえてくる。

歴史とモダンの融合

鍾路とは、光化門交差点から東大門（興仁之門）までの二・八キロメートルの大通りのこと。ソウルが「漢陽」という名前で朝鮮の首都になった一三九四年から、商業と交通を中心に都心の機能を担ってきたもともと古い街である。「鍾路区」という地名もあるが、それは鍾路から北方面に

この二つの意味のあいだでズレが生じる。都市が拡張し分散することで、旧来の中心が衰退する。このような「都心空洞化」は、急速な都市化とグローバル化がもたらした普遍的な問題でもある。

ソウルの場合、「都心」といえば、六〇〇年間近く「四大門」の内側を意味していた。その地理的・社会的中心性が分散し始めたのは、高度経済成長と人口の集中が加速化した七〇〇八〇年代のことだった。大統領府（行政権を光化門に残しつつも、国会（立法権）が汝矣島に移転した一九七五年から、最高裁判所（司法権）が江南に移転した一九九五年にかけて、「国家権力」を含む様々な中心機能の分散がなされた。地理的な分散も、「江南開発」がなされた七〇〇八〇年代を経て、江北（五四八万人）と江南（五一四万人）の人口がほぼ半々になった一九九〇年にはほぼ完成した。

しかし、その過程は旧都心に深刻な副作用を与えた。人口の規模ではみえない経済資本や社会関係資本が「江南」に集中することで、「江北」と「江南」のあいだの不均衡が生じ、既存の都心が急速に衰退していったのである（連載第一、二回参照）。街の高齢化が進み、商業・交通の中心地として保っていた社会的な位相も急速に落ちていった。九〇年代になると「都心空洞化」が本格的に公論化されはじめ、ソウルが首都になってから六〇〇年になる一九

広がる二三・九一平方キロメートルの地域のことである。

日本人とも縁が深い。植民地時代の京城において、朝鮮人と日本人の主な居住空間は清溪川を境に、「鍾路」と「本町」(明洞・忠武路二帯)に分かれていた。植民地支配や帝国主義に反対する大規模の民族蜂起「三一・一独立運動」(一九一九年)が起きたのも鍾路三街にある「タブコル公園(バゴダ公園)」だった。当時の日本人にとって清溪川の向こう側は、同じ「京城」でも、「朝鮮的なもの」の匂いとリズムにあふれる異質な空間だっただろう。そして、日本で海外旅行が自由化された一九六四年からソウル旅行が本格化する、その鍾路の異質性は、「京城的なもの」が多く残った明洞のノスタルジックな風景とともに、観光者としての日本人がもつとも好む場所性として消費された。

教保文庫と光化門郵便局のあいだからほぼ一直線に伸びている鍾路は、一街から六街まで分かりやすく区切られている。一八九九年から初の電車が走ったこの区間を、今は光化門駅(五号線)、鐘閣駅(二号線)、鍾路三街駅(三、五号線)、鍾路五街駅(二号線)、東大門駅(一、四号線)の地下鉄駅が繋いでいる。

ドラマ「宮廷女官チャングムの誓い」にも登場する朝鮮時代の御用商店「六矣塵」があった鍾路一〜二街からはじまる鍾路の周辺には、様々な歴史文化遺産であふれている。

はじめた。たとえば、「冬のソナタ」(二〇〇二年)に登場した「北村」の「韓屋」は、それまでほぼ放置されていた伝統的な家屋形態を、二〇〇〇年前後から積極的に保全・活用したものだ。その後、旧都心のイメージに欠かせない観光資源となった。

そのような変容は、歴史文化遺産とモダンな都市イメージが共存するアイデンティティと、観光資源としての役割を定着させた。新型コロナウイルスが流行する前、人口約一六万人の鍾路区を訪れる国内外の観光者の数は一日約三〇万人にのぼっていた(二〇一七年、鍾路区発表)。新型コロナウイルス渦中にもネットフリックスなどを通じて世界的なヒットをつづけている韓国のドラマや映画でも、そういった「ソウル」の



鍾路二街。右はタブコル公園

風景をみるのももう日常的なことになった。

そういう意味で、フォートブリーズホテル(二〇一五年、光化門)やネットフリックス社(二〇一七年、鍾路)のような世界的企業が、「韓国的なイメージ」とグローバルなビジネス環境両方を求め

毎年大晦日の夜に除夜の鐘が打たれる「普信閣」(一三九六年)がある一街と二街の交差点は一三九五年に建てられた「曹溪寺」とつながるし、二街と三街の境にある初の近代的都市公園「タブコル公園」に入れば、「円覚寺址十層石塔」(国宝第三号)と「円覚寺碑」(宝物第三号)をみる事ができる。

四街からは朝鮮王朝歴代の王と王妃の位牌を祀った霊廟「宗廟」(一三九四年)と昌徳宮(一四八三年)といった二つのユネスコ世界遺産が並んでおり、六街では「興仁之門」(東大門)をみながら漢陽都城(ソウル城郭)の横を歩くことができる。範囲を鍾路区に広げると、重要文化財の数は四三九件にのぼる。

歴史文化遺産のあいだを埋めているのは「タワー」「タウン」などの名をもったモダンな高層ビル。旧都心が「歴史文化都市」というテーマで整備されはじめたのは九〇年代半ばからだだったが、二〇〇〇年代に入り、その場所のイメージを完成させたのは、皮肉にも「江南的なもの」の拡張ともいえる洗練された建築物と店、そしてそのなかを歩く若者と観光客のすがただった。

鍾路一〜二街を中心に歴史とモダンがときには激しくせめぎ合いながら「ソウルのなもの」として融合していくと、その風景は時代劇ではなく、流行に敏感な現代劇に登場して、江南ではなく、旧都心を選択しはじめているのは興味深い。ナショナル・アイデンティティと洗練されたグローバル都市イメージが旧都心に新たな機能を与えたのはもちろん、ソウル全体の空間構造と場所性にも大きな影響を与えはじめているからだ。

「流動性」という都市資源

鍾路一〜二街と光化門を中心に二〇〇〇年代に本格化した旧都心の変容が、「ナショナル・アイデンティティ」を強く意識したものであったとするならば、二〇一〇年前後に鍾路五〜六街と「東大門」を中心に行われた都心の変容は、「グローバル都市」のネットワークのなかで新たな機能を求めて行われたものだった。

五街の広場市場(一九〇五年)から六街の東大門総合市場までを、清溪川を南北(鍾路と支路)に渡りながら歩いてみると、韓国全体のファッション産業をリードした巨大な市場群と次々に出会える。三〇以上のビルと約三万五〇〇〇の店で賑わうこのなかでは、洋服と韓服を問わず、材料からデザイン、製造まで、ファッション商品の生産と消費の全過程が行われる。

この地域にファッションに特化した商圈が成り立ったのは、一九六二年に衣類を専門に扱うアジア最大規模の平

和市場ができてからだった。当時全国で消費される衣類の七割がこの辺の工場で生産されていた。輸出産業の目玉でもあった。平和市場にいくと、一九七〇年、開発独裁による過酷な労働環境を告発して焚身した全泰官烈士の銅像と、その志に連帯を示す世界中の労働組合のメッセージが刻まれた歩道のタイルをみる事ができる。

東大門市場が、若者や観光客で賑わう先端のファッション・クラスタとして国内外に知られるようになったのは、高層ファッションビルが次々と建てられた一九九〇年代後半からだった。一九九七年のアジア通貨危機による影響で集まってきた若いデザイナーたちの活躍とインターネットによる市場の拡大、韓流コンテンツが媒介した観光客の急増も大きな要因だった。

そして二〇〇〇年代半ばになるとファッションを含むデザインという言葉が「ソウルらしき」を演出する重要なキーワードとして浮上した。二〇一一年にソウルがユネスコ創造都市ネットワークの「デザイン都市」に加盟認定されたのは、東大門市場で育ったファッション産業なしでは語れない。ユネスコのホームページにある「デザイン都市ソウル」のフロントページを飾っているのは、二〇一四年に完成したDDPのイメージである。

完成に至るまで「ソウルの景観を損なう」として様々な

術家や起業家たちが「レトロモダン」的に改造した街で、若者向けの観光スポットとして、都心の高齢化を象徴していた鍾路三街周辺の風景を変えている。鍾路四街から清溪川を越して乙支路に跨がっているのは、六〇〇八〇年代産業的近代化のランドマークだった電気街「世運商街」(一九六八年)。一時期撤去の危機から逃れ、都市再生の拠点になると、街々に隠れるように点々と増えた個人的な店が人氣を集め、いわゆる「乙支路ブーム」を起している。

いずれもそのブームを主導しているのは、「ミレニアル世代」と呼ばれる八〇年代から九〇年代半ば生まれの若者たちと、インスタグラムをはじめとするソーシャルメディアだ。ここ数年Kカルチャーの特徴の一つは、ドラマ「応答せよ」が描いたような、八〇〇九〇年代の文化を再解



レトロモダンな建物が並ぶ益善洞

釈・再生産する

「ニュートロ」ブームである(「ニュー」(New)と「レトロ」(retro)の合成語)。

その一環として日本のシティ・ポップも人気である。

空洞化や高齢化

論争を巻き起こした、その巨大なマグロの背中のような予想の通り、確かにそれまでこの街にあった「ソウルらしき」を壊している。しかし実際その周辺の匂いやリズムと照らし合わせてみると、ファッションという、流行に敏感でなければならぬ産業にこだわってきたこの街のアイデンティティが、むしろDDPにおいて完成されているようにみえる。一生泳ぎつづけるマグロのような流動性そのものが「ソウルらしき」を表す都市資源であることを、納得させられてしまうのだ。

「再生」の夢

二〇〇〇年代以降の旧都心の変容を主導した理念・方法論は、行政的には李明博・呉世勲元市長の九年間(二〇〇二〜二〇一一年)における「再開発」と、朴元淳元市長の九年間(二〇一一年〜二〇二〇年)における「再生」だった。しかしそのなかで、新しい「ソウルらしき」を見出し、都市のカルチャーをつくり上げたのは、結局人びとのまなざしである。

それを著しく物語っているのが、ここ数年急速に変わっている鍾路三街から四街のあたりである。たとえば、最近日本のガイドブックにも登場した鍾路三街の益善洞。一九二〇年代に造成された韓屋村を、二〇一五年頃から若い芸

に苦しんでいた旧都心に残されていた匂いとリズムを「洗練されたクールなもの」(韓国では「ヒップ」という形容詞をよく使う)としてとらえるまなざしが向けられているのは、その「ニュートロ」ブームの空間的展開でもある。都心の古い風景を、新しい「ソウルらしき」として「発見」して楽しむそのカルチャーは、数々の偶然が重なった結果である。ミレニアル世代とソーシャルメディアの特異性だけではなく、世界的なレトロブームと韓流コンテンツのさらなる流行、ジェントリフィケーションの繰り返しによる盛り場の移動とソウルの成長のなかで取り残されていた都心の様々な遺産などが、複雑に絡み合うことで生まれた出来事なのだ。

しかしながら、そのなかを歩いていると、これで旧都心そのものが再生できるのか、という疑問が頭から離れない。そこには、空洞化や高齢化という言葉だけでは語り尽くせない何かがある。それは、そこに存在しつづけた住民や労働者、芸術家などの様々な主体や文化が、自分たちの場所から排除されてしまうことに対する懸念でもある。すでにジェントリフィケーションが深刻な都市問題になっているなかで、それらの主体と多様なまなざしが共存する「ソウルらしき」をつくっていくことは、六百年の「都心」だからこそ試みることのできる「再生」なのかもしれない。